

青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連 ——質問紙と母子画を用いての検討——

松下姫歌・岡林睦美

The relations between attachment style in adolescence and mother-and-child image ——Through an analysis of using questionnaire and mother-and-child drawings——

Himeka Matsushita and Mutsumi Okabayashi

内的作業モデル (Internal Working Model: IWM) は, Bowlby (1973 黒田他訳 1977) の提唱した概念であり, 愛着関係の基盤としてはたらく対人認知パターンであり, 対象関係パターンである。IWM は, 自分は他者に愛される価値を持つかという自己の IWM (見捨てられ不安), 他者は自分を受容してくれるかという他者の IWM (親密性回避) の 2 次元から捉えられ, そのバランスによって IWM の性質の違いを, 愛着スタイルとして類型化する。本研究では, 不安定な愛着スタイルの変容に資する観点として, 現在から過去経験を捉え直す臨床心理学的観点を基本とした。第 1 研究では, 青年の愛着スタイルと想起される幼少期の母子イメージとの関連を質問紙によって検討し, 第 2 研究では, 愛着スタイルの特徴を, 母子画に表現される母子イメージに含まれる無意識的観点の特徴として質的に検討した。その結果, 見捨てられ不安は, 無意識的には自他を「見出す」ことを求めるが, 良いイメージのみを見ることで安定を保とうとする心的働きが示唆され, 親密性回避は, 他者との関わりを回避する中で, 回避して向き合い難い面が存在することに葛藤する心的働きが見られた。

キーワード: 内的作業モデル, 愛着スタイル, 母子画

問題

1 愛着理論

心的次元において自己なるものと他者なるものをどのように見出し, 自己や他者にどのような心的関わりをもち, その関わりの中でさらに自己と他者をどのように見出すのか, といった自己や世界観の形成や関係性の形成に関する根本的問題を考えようとするとき, 多くの心理学者が“母子関係”という 2 者関係をその基盤として想定してきた。誰もが母親から生まれ, 母親を始めとする養育者との心的な関わりを通して育っていく。この点について, Bowlby (1969 黒田他訳 1976; 1973 黒田他訳 1977) は, 子の母に対する情緒的絆を愛着 (Attachment) と呼び, 乳児が母親と他者を区別し, 母親という特定の人物に対して注意や関心を集中させる心理機制であるとしている。愛着は, 最初は主に母子関係における日常の具体的なやりとりを通して発達していくとされているが, やがては成長とともに

に、母親という枠を超えた特定の区別された人物との間に築く情緒的な絆となる (久保, 1998)。

2 内的作業モデル

乳幼児の頃は、母親に対して保護を求めたり、母親との分離に抵抗を示したりするなどの行動の次元に、愛着の質が現れる。しかし成長とともに、愛着の様相は行動レベルから対人認知としての表象的レベルへと変化し、個人の内的表象として形成される。この愛着にまつわる内的表象は、対人認知的枠組みとなり、他者の自分に対する態度を予測し、他者との関係における事象を関連付けて捉え、他者への態度を形成する基盤となる。これを Bowlby (1969, 1973) は、内的作業モデル (Internal Working Model: 以下、IWM と記載) と呼んでいる。例えば、母親との愛着関係の性質について、「幼少期に母親に抱きついていても振り払われることが多かった」といった経験から、母親という対象については「愛すると拒否される」、自分自身についても「愛されるに値しない存在なのだ」というように、自他に対して否定的な認知的枠組みを形成し、そのために、相手との深い関わりを避ける行動をとるといったことがありうる。もし、深い関わりをもとうとすると、自他への不信から、「相手は自分を本当には愛していない」という確証を得るまで納得できないために、結局は、心理的にも打撃を受け、現実に相手との関係も破綻する、といったことが生じる可能性があるために、心的な関わりを回避するのである。この点に関し、久保 (1998) は、IWM は、母親を始めとする養育者との愛着を維持するための機能であり、養育者と適応していかざるを得ない対処方略として形成されていくと述べている。加えて、IWM は、成長にしたがって、自己が世界との関わりに適応していく方略として機能し、発展していくにつれ、他者一般への対人認知に影響するものであると考えられている。

3 愛着スタイル

Bowlby (1973) は、IWM を、他者は自分の要求に対してどのように応じてくれる存在なのかといった他者に関する作業モデル、また、自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのかといった自己に関する作業モデルの 2 要素からなる、他者と自己の有効性の主観的な確信としている。Bartholomew (1990) は、IWM をこの 2 次元から捉える理論に基づき、他者の IWM と自己の IWM の 2 軸を、それぞれポジティブかネガティブかの 2 方向で捉えることで、IWM の性質の違いを愛着スタイルとして説明し、次の 4 つに分類している (Figure 1, Table 1)。

- 1) 安定型: 自己と他者の IWM がともにポジティブである型。自他への信頼感が高く、個としての自律性と他者との親密な関係を両立しうる。
- 2) とらわれ型: 自己の IWM がネガティブで他者の IWM がポジティブである型。自分に価値がないと感じる一方で、受け入れてくれる他者の存在に期待をもつ。そのため、見捨てられ不安が強く、自分を支えるために親密な関係にのめり込む。
- 3) 愛着軽視型: 自己の IWM がポジティブで他者の IWM がネガティブである型。自分に価値があると感じているが、他者の価値への評価が低く、親密な関係を避け、独立性や自律性を重視する。
- 4) 恐れ型: 自己と他者の IWM がともにネガティブである型。自分には価値がなく、他者も自分を受け入れてくれないというように、自他に対する不信感が強い。そのため見捨てられる不安が強く、親

密な関係を回避する。

この理論に基づき、Brennan & Shaver (1998)が ECR 尺度を作成しており、中尾・加藤 (2004) はそれをもとに、一般他者に対する愛着スタイルを測定しうるものとして、一般他者 ECR 尺度を作成している。この尺度では、自己の IWM は、自分が他者から受け入れられるか/受け入れられないかについてのモデルであるため、“見捨てられ不安”に対応し、他者の IWM は、他者が自分を受け入れてくれるか/くれないかについてのモデルであるため、“親密性回避”に対応するものと位置づけており、この2軸の高低の組み合わせにより、Bartholomew (1990)と同様の愛着スタイル4型を分類する(Figure 1)。

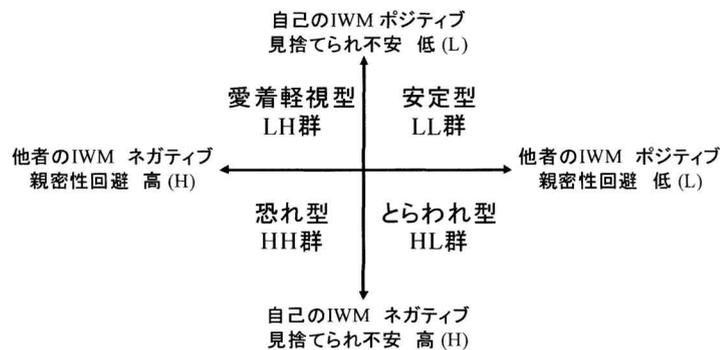


Figure 1 愛着スタイルの4類型化

Table 1

愛着スタイル4群の特徴

- ・**恐れ型**: 拒絶されることへの恐怖、自分や他者への不信感から親しい関係を回避する。
- ・**とらわれ型**: 親密な関係に過剰にのめり込む、自分の幸福感を持つ上で他の人の受容に依存している。
- ・**愛着軽視型**: 親密な関係の重要性を過小評価する。独立性と自律性を重視する。
- ・**安定型**: 親密な友人関係を大切にす、個人的な自律性を失うことなく親しい関係を維持する能力がある。

4 IWM 研究における発達心理学的観点と臨床心理学的観点

IWM の従来の研究における主流は、幼少期に形成された愛着スタイル(IWM の型)がその後の愛着関係に影響を及ぼしているか否か、あるいは、幼少期に形成された母親との愛着スタイルが、その後の重要な他者との愛着スタイルといかに関連するか、といった発達の観点によるものであった。方法としては、縦断研究によって、その時期その時期の愛着スタイルを評価し、愛着スタイルの発達を検討する試みが盛んに行われ、愛着スタイルのある程度の一貫性が示す研究が多いが、事例レベルでは成長にしたがって愛着スタイルが変化する例も多く見られてきた。一方、現在の愛着スタイルと、過去の愛着関係についての想起をもとに評定された愛着スタイルとの関連を調べる研究も多くおこな

われてきた。こうした研究として、例えば、青柳・酒井 (1997)や瀧川 (2003) は、想起された幼少期の母親に対する愛着スタイルと青年期の愛着スタイルとの関連が見られるとしている。これらの発達の観点からの研究は、IWM が一生を通じての愛着関係や対人関係を築く基盤として大きな位置を占めることを示すものとして意義がある。

しかし、一方で、幼少期に不安定な愛着スタイルを形成した人が、その後の対人関係においても不安定な愛着関係をもちやすいとすれば、そのような人がより安定した愛着関係を築いていくためには何が必要となるのだろうか。このような臨床心理学的観点に立つ時、愛着スタイルの変容、つまりはその性質を裏付ける IWM の変容についてのアプローチが重要となる。久保田 (1995) は、IWM の変容とは、回顧のまなざしで過去を解釈し、理解し、意味付けをしながら言葉にしていく作業を通して過去の体験が加工・統合されることとしている。加えて、心理臨床面接では特に、このようなプロセスをクライアントが辿ることを治療者が援助することが目標であると述べている。これは、過去の事実関係に基づく発達の観点ではなく、現在から過去を捉え直す視点に意味を持たせる臨床心理学的観念の IWM 研究と言える。つまり、愛着の連続性や発達を重視するのではなく、過去の意味づけ・統合という視点をもつ臨床心理学的観念の IWM 研究では、過去の事実関係よりも、現在から過去の体験を振り返った時にどのようなイメージとして想起されるか、過去の経験を現在の時点からどう捉えられているかをつかむことが必要となる。

また、北川 (2006) は、質問紙法のみでは、IWM における情報を処理する際の結果を測定しているのであり、情報処理過程そのものの情報は得られないと指摘している。そもそも IWM の働きとは、事実や経験そのものを正確に認知する働きではなく、それに対してどのように目を向けているのかという働きを扱うため、その質を検討することが重要である。しかし、質問紙法では、単に愛着スタイルの型を測定するにとどまり、愛着スタイルとして規定されるまでのその過程や背景を知ることはできない。よって、IWM の質を検討する為には、質問紙法だけではなく、無意識的観念を取り入れた投影法を用いることが必要であると言える。また、IWM の変容について、久保 (1998) は、IWM の再構成化には、今まで近づきにくかった情報 (防衛) を、意識的自覚の中に取り入れて完全に再組織化や再表象化を行う過程が必要であると述べている。この点より、無意識的に防衛していた情報を捉えることで、愛着スタイルの背景にある IWM の変容に関わる情報を視野に入れることができると言える。

5 愛着スタイルの無意識的観念を捉える方法としての母子画 (mother-and-child drawings)

母子画 (mother-and-child drawings) は、Gillespie, J (1994, 松下他訳 2001) によって考案された投影法であり、対象関係論を背景にしている (馬場, 2005)。対象関係論と IWM 理論は、内的表象を扱う点や早期母子関係にまつわる内的表象を重視する点において共通する部分が多い。そもそも、Bowlby (1973 黒田ら訳, 1977) は、IWM は、対象関係論をシステム理論の視点から記述し直した概念であるとしている。

Gillespie (1994) も言う通り、対象関係論は外的現実そのものではなく、体験によって色づけされた内的イメージを扱う (南里・谷, 2006)。つまり、対象関係とは、一言でいうと、対人関係の持ち方の

基盤となる内的イメージといえる。外的現実としては、自己と他者は歴然と区別された存在であるが、心的現実としては、自己と他者とはアプリアリに区別されてはいない。例えば、自分と相手がある側面で同一視したり、あたかも自分の一部のように感じて、相手が辛いと自分のことのように辛くなるというようなことがある。あるいは、自分にとって受け容れ難いものを他者に投影して嫌う、というようなことがある。心的現実においては、“自己”と感じられるものと“他者”と感じられるものが、さまざまに切り分けられることで、自己と他者が成立しており、そういう意味での自己が他者とのような関係をもつかが、対象関係と言える。馬場 (2005) は、母子画に描かれる母子像は内的世界の自己と対象を表象していると述べている。これは、単に、母親像か子ども像のいずれかが自己で、いずれかが他者ということの意味しない。母子像のさまざまな側面に、心的現実としての自己性と他者性とその関係が表現されているといえ、それらを読み取ることで、個人の対象関係を理解することができると考えられる。つまり、描画に表れる母子像は、個人の内的世界における対象との関わり方を反映したものと考えられる。

したがって、母子画を用いることで、内的表象としての対象関係イメージに含まれる無意識的観点をさまざまに汲み上げることが可能になると考えられる。そのことによって、愛着スタイルの「分類」を捉えるだけに留まらず、その愛着スタイルをとる心の働きの性質を捉えることが可能になり、さらには、その愛着スタイルをとる中で取り組んでいる課題性や、その課題にどのように取り組もうとしているのかという、まだ獲得するにはいたっていない潜在的な問題解決能力の側面を捉えることが可能になると考えられる。

目的

本研究は、青年のもつ愛着スタイルと母子イメージとの関連について、第1研究では幼少期の母子イメージを扱い、第2研究では描画に表れる母子イメージを対象関係の観点から検討することで、IWMの性質を捉えることを目的とする。

研究1

1 目的

第1研究では、青年が現在もつ愛着スタイルと、幼少期の想起にもとづく母子イメージとの関連を、質問紙によって言語化・意識化可能なレベルから検討する。

2 方法

対象者: 大学生236名 (男性61名, 女性173名, 不明2名) から回答を得た。平均年齢19.77歳 ($SD=1.76$, $range: 18\sim 25$ 歳) であった。

質問紙の構成:

- ①フェイス項目 (性別・学年・学部・年齢)
- ②幼少期の母子関係イメージ尺度 (酒井, 2001)

Ainsworth (1978) が、愛着スタイルの型として安定・回避・アンビバレントの3因子を想定した9項目を青柳・酒井 (1997) が翻訳したものに、酒井 (2001) が新たな項目を加えた16項目。対象者に

小学校入学以前(6歳以前)の母親との関係を回想させる。非常によく当てはまる(6)～全く当てはまらない(1)の6件法で評定を求める。

③青年期の愛着スタイルを測る質問紙: 一般他者 ECR 尺度(中尾・加藤, 2004)

Brennan & Shaver (1998) による自己と他者の IWM をモデルとした, ECR 尺度を, 中尾・加藤 (2004) が一般他者版に改めた一般他者版 ECR 尺度。36 項目, 非常によく当てはまる(7)～全く当てはまらない(1)の7件法で評定を求める。

手続き: 集団法にて実施した。講義の終了後の休み時間を利用し, 質問紙にその場で回答してもらい, 回収を行った。

3 結果

3-1 幼少期の母子関係イメージ尺度の因子分析

幼少期の母子関係イメージ尺度 16 項目のうち, 逆点項目については, 6 件法による評定値の 1～6 点を 6～1 点に逆転させる処理をおこなった。天井効果がみられた 1 項目 (項目番号 1), フロア効果がみられた 3 項目 (項目番号 5, 8, 14) を除外した 12 項目の評定値をもとに因子分析を行った。スクリープロットや固有値の減衰状況や説明率, 解釈可能性から 2 因子を指定し, 再度因子分析を行った (重みなし最小二乗法, *promax* 回転)。その結果, 共通性が.20 に満たなかった項目および因子負荷量が.40 に満たなかった項目 (項目番号 2, 3, 15) を除外し, 再度因子分析を行った。その結果, 第 1 因子 7 項目, 第 2 因子 2 項目の計 9 項目が採択された (Table 2)。

第 1 因子は, 酒井 (2001) において, アンビバレントな母子関係因子として抽出された項目番号 12,

Table 2
幼少期の母子関係イメージ尺度の因子分析結果 (重みなし最小二乗法 *Promax* 回転)

項目番号	項目内容	安定母子イメージ	依存的母子イメージ	共通性
(安定) 13	母親と出かけるのが好きだった。	.85	-1.25	.625
(安定) 10	母親と遊ぶのが楽しかった。	.726	.008	.533
(安定) 4	R:私は母親が何をしても, それに関心がなかった。	.679	.014	.451
(アンビバレント) 12	何かあれば, 母親はすぐに来てくれると思っていた。	.653	-.015	.416
(安定) 7	私は母親のそばでは安心感があった。	.583	.238	.545
(安定) 16	私はよく母親に, 褒められた。	.546	.019	.31
(拒否) 11	助けてほしい時に, 母親は助けてくれないことがあった。	-.442	-.045	.279
(アンビバレント) 6	母親がそばにいないと, 夜眠れなかった。	-.037	.603	.341
(アンビバレント) 9	幼稚園(保育園)に行っても, 母親を思い出してずっと泣いていたことがあった。	.011	.575	.338
α係数		.686	.535	
因子関相関		.535	—	
(安定) 1	私は母親を好きだった。		天井効果	6.17
(拒否) 5	いつか見捨てられるのではないかと思った。		フロア効果	0.83
(拒否) 8	私が泣いていても, 母親は関心がなかった。		フロア効果	0.86
(拒否) 14	私は母親の愛情が薄いと思ったことがあった。		フロア効果	0.96
(拒否) 2	私は同じことをしても怒られたり, 怒られなかったりした。	-.17	-.34	.037
(アンビバレント) 3	母親が出かける時は, 無理やりついでにこうとした。	.294	.257	.241
(アンビバレント) 15	親戚の家に遊びに行っても, 親がいないと怖かった。	.053	.386	.176

()内は酒井 (2001) の下位尺度名: 安定 = 安定母子関係因子, 拒否 = 拒否的な母子関係因子
アンビバレント = アンビバレントな母子関係因子。Rは逆転項目。

および拒否的な母子関係因子として抽出された項目番号 11, を除く残り 5 項目は, 酒井 (2001) 同様, 安定母子関係因子として抽出された。本研究ではいずれも, 母親と子どもの関係が温かく肯定的であることを示す項目内容であるため, 安定母子イメージ因子と命名した (本研究では, 過去の事実関係の上での母子関係ではなく, 現在想起されるイメージという部分を強調するため, 母子 “イメージ” と呼ぶ)。

第 2 因子は, 酒井 (2001) においてアンビバレントな母子関係因子として抽出されているものである。しかし, この項目内容自体が依存-自立などの両価性をもつアンビバレントな内容を示すものではなく, むしろ母親に対する依存傾向の高さを示す内容であると考えられるため, 依存的母子イメージ因子と命名した。

3-2 一般他者版 ECR 尺度の因子分析

一般他者版 ECR 尺度 36 項目については, 天井効果・フロア効果は見られなかったため, 全項目の評定値をもとに因子分析を行った。その際, 逆点項目については, 7 件法による評定値の 1~7 点を 7~1 点に逆転させる処理をおこなった。スクリープロットや固有値の減衰状況や説明率, 中尾・加藤 (2004) の結果などの解釈可能性から 2 因子を指定し, 再度因子分析を行った (重みなし最小二乗法, *varimax* 回転: 因子間相関-.17)。その結果, 共通性が.20 に満たなかった項目 (項目番号 21, 33, 34) および両方の因子に.40 以上の付加を示している項目 (項目番号 11, 35) を除外し, 再度因子分析を行った。その結果, 共通性が.20 に満たなかった項目 (項目番号 29) を除外し, 再度因子分析を行った。その結果, 共通性が.20 に満たなかった項目 (項目番号 31) を除外し, 再度因子分析を行った。結果, 第 1 因子 17 項目, 第 2 因子 12 項目の計 29 項目を採択した (Table 3)。

得られた 2 因子は, 中尾・加藤 (2004) の結果と同様であったため, それぞれ「見捨てられ不安」因子, 「親密性回避」因子と命名した。

3-3 青年期における愛着スタイルと想起される幼少期の母子イメージとの 2 要因の分散分析

ここでは, 愛着スタイルとして規定される青年期における対人認知の仕方と想起する幼少期の母子イメージとの関連を検討する。

一般他者版 ECR 尺度について, 因子分析の結果抽出された 2 因子 (見捨てられ不安因子・親密性回避因子) の各因子の項目合計得点を算出した。その後, それぞれの得点を中央値によって高群・低群に分類した (見捨てられ不安因子; 中央値 58=高群 58 点以上, 低群 57 点以下; 親密性回避因子; 中央値 45=高群 45 点以上, 低群 44 点以下)。

要因 1: 見捨てられ不安因子得点 (水準①高群・水準②低群), 要因 2: 親密性回避因子得点 (水準①高群・水準②低群) を独立変数, 母子関係イメージ尺度 (安定母子イメージ因子得点, 依存的母子イメージ因子得点) を従属変数とする 2 要因分散分析を行った。

その結果, 安定母子イメージについては, どの要因についても有意な主効果や交互作用は見られなかった (Table 4, Table 5)。

一方, 依存的母子イメージについては, 見捨てられ不安にのみ主効果 ($F(1,232)=5.48, p<.05$) が見られ, 見捨てられ不安低群よりも, 見捨てられ不安高群の方が依存的母子イメージを持ちやすいと言える結果となった (Table 6, Table 7)。

Table 3
一般他者ECR尺度の因子分析結果 (重みなし最小二乗法 Varimax 回転)

項目番号	項目内容	見捨てられ不安	親密性回避	共通性
(見) 14	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	.766	.026	.588
(見) 8	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	.75	.073	.568
(見) 22	R私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。	.713	.087	.515
(見) 2	私は見捨てられるのではないかと心配になる。	.705	.173	.526
(見) 6	私が人のことを大切に思うほどには、人は私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	.661	.111	.499
(見) 4	私は、いろいろな人との関係について非常に心配している。	.618	.034	.383
(見) 18	私は、人が私に対して好意的だということを何度も何度も言ってくれることが必要だ。	.607	.064	.373
(見) 16	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れて行ってしまう。	.6	-.117	.374
(見) 12	私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。	.597	.133	.374
(見) 26	私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	.59	.039	.35
(見) 24	私は、人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら、私はきつと気が動転して悲しくなったり腹が立ったりする。	.566	-.07	.326
(見) 32	私は、人が必要な時にいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	.544	.014	.296
(見) 30	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れて行ってしまう。	.503	.055	.256
(見) 28	私は誰かと付き合っていないと何となく不安で、不安定な気持ちになる。	.475	-.254	.291
(見) 20	私はときどき、人に自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしている、と感じる。	.468	-.034	.22
(見) 10	私は、いつも人が私に対して抱いてくれる気持ちが、自分が人に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う。	.453	-.11	.217
(見) 36	私は、知り合いが私のことをほっといて自分1人で何かをすることが重なってくる腹が立ってくる。	.444	-.073	.203
(親) 23	私は、人とあまりに親密になるのがどちらかというと好きではない。	-.017	.712	.507
(親) 9	私は、人に心を開くことに抵抗を感じる。	.176	.691	.508
(親) 7	私は、人が自分に対して非常に親密になりたがってくると、いごち悪く感じる。	.17	.637	.434
(親) 17	私は人とあまり親密にならないようにしている。	.139	.619	.399
削除 13	私は、人があまりに親密になってくると、とてもイライラしてしまう。	.18	.605	.399
(親) 3	R私は人と親密になることがとても心地よい。	-.135	.587	.363
削除 5	人が私と親密になろうとするやいなや、私はその人から距離をとろうとしている自分に気がつく。	.306	.585	.436
(親) 1	私は、心の奥底で何を感じているかを人に見せるのは、どちらかというと好きではない。	-.114	.535	.299
(親) 15	R私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。	-.213	.531	.328
(親) 25	R私は人に何でも話す。	-.154	.53	.305
(親) 19	R私は、比較的容易に人と親密になれると思う。	-.102	.507	.267
(親) 27	R私はたいてい、人と自分の問題や心配事を話し合う。	-.252	.408	.23
	α 係数	.902	.854	
	因子寄与	6.5	4.28	
	累積寄与率	22.42	37.19	
(親) 21	私は、自分が人に依存することを許すことがなかなかできないと思う。	-.249	.391	.153
削除 33	R困った時に人に助けを求めると、何かちょっとは状況が良くなる。	-.158	.33	.134
(見) 34	人にダメだなあとと言われると、自分は本当にダメだなあと思う。	.385	-.042	.15
削除 35	R私は、慰めや励ましなど、いろんなことで助けを求める。	-.401	.463	.375
削除 11	私は、人と親密になりたいと思うが、いつの間にかついつい後ずさりしていることが多い。	.431	.452	.39
(親) 29	R私は人に頼ることに抵抗がない。	-.045	.416	.175
(親) 31	R私は、人に慰めやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。	.031	.433	.188

()内は中尾・加藤(2004)の低位尺度名:見=見捨てられ不安, 親=親密性回避。Rは逆転項目。

Table 4
分散分析表 (従属変数:安定母子イメージ)

変動因	SS	df	MS	F	p
見捨てられ不安 (A)	6.81	1	6.81	0.32	n.s.
親密性回避 (B)	39.86	1	39.86	1.87	n.s.
A×B	1.09	1	1.09	0.051	n.s.
誤差	4944.23	232	21.31		
全体	4989.62	235			

Table 5
因子の高低による安定母子イメージ因子得点の記述統計量

見捨てられ不安因子				
	平均値	SD	最小値	最大値
高群(N=121)	29.55	4.64	11	39
低群(N=115)	29.28	4.59	13	38
親密性回避因子				
	平均値	SD	最小値	最大値
高群(N=123)	30.65	4.67	12	40
低群(N=113)	31.19	4.57	15	40

Table 6
分散分析表 (従属変数: 依存的母子イメージ)

変動因	SS	df	MS	F	p
見捨てられ不安 (A)	29.89	1	29.89	5.48	0.02*
親密性回避 (B)	3.81	1	3.81	0.698	n.s.
A×B	3.58	1	3.58	0.657	n.s.
誤差	1264.96	232	5.45		
全体	1300.05	235			* p<.05

Table 7
因子の高低による依存的母子イメージ因子得点の記述統計量

見捨てられ不安因子				
	平均値	SD	最小値	最大値
高群(N=121)	5.4	2.27	2	12
低群(N=115)	4.71	2.39	2	12
親密性回避因子				
	平均値	SD	最小値	最大値
高群(N=123)	4.97	2.38	2	12
低群(N=113)	5.17	2.32	2	11

4 考察

1) 幼少期の母子関係イメージ尺度の因子分析においては、酒井 (2001) において得られたような「安定」「拒否」「アンビバレント」の3因子ではなく、「安定」「依存」の2因子が抽出された。このうち、「依存」は「アンビバレント」の一部の項目からなるものであり、本研究の結果では、愛着関係イメージの性質として、「安定」と「アンビバレント」の一部の性質が抽出されるに留まり、「拒否」的愛着関係イメージは抽出されなかった。

「依存」については、「アンビバレント」の一部の項目からなる。「アンビバレント」の項目群は、安定した内的表象をもちつつもそれが内在化されていない状態を示す点で共通していると言えるが、本研究で採択された項目は、特に「夜、眠るとき」や「幼稚園・保育園」など、未知の暗い面へ向かう際や外的世界へ向かう際の不安に対抗するための、母親への依存を示すものと言えるため、「依存」と名づけた。少なくとも、この「依存」因子は「安定」因子とは性質の異なるものとして心的に捉え

られているようである。

また酒井(2001)の「拒否」因子の項目は、1項目のみ、「安定」因子の逆点項目として抽出された他(項目番号 5, 8, 14)は、すべてフロア効果が見られた。このことに、酒井(2001)の「安定」因子として抽出された項目(項目番号 1)に天井効果が見られたことを考え合わせた場合、①本研究の調査対象者はもともと安定的な母子イメージをもっている傾向が高いというサンプルの偏りがある可能性があること、あるいは、②特に「拒否」因子の項目表現が「拒否」的な愛着関係を直裁に示すものであるために、心理社会的望ましさや、拒否的な愛着関係を認識することへの抵抗が働いた可能性があることが考えられる。

2)青年期の愛着スタイルと想起される幼少期の母子イメージの関係をみるためにおこなった分散分析の結果では、①「安定」母子イメージについて愛着スタイルという対人認知形式との関連は見られなかった。つまり意識的には、見捨てられ不安や親密性回避などの対人認知の特徴に関わらず、安定母子イメージが想起されうるものだと解釈できる。しかし、この結果は意識的に捉えられる範囲のことであり、何らかの防衛が働いているとも考えられる。一方、②依存的母子イメージについては、見捨てられ不安因子の主効果が見られ、見捨てられ不安が高い人が低い人よりも、依存的母子イメージをもちやすいことが示された。自己観のネガティブさが、依存的でしがみつような2者間の関係性と結び付いていると言える。自分には他者と関わったり、頼ったりする価値をもたないとする自己観のネガティブさの背景にある、2者間のしがみつや依存的なイメージが母子像として意識的に表れたものであると考えられる。

研究 2

1 目的

第1研究では、愛着スタイルと非言語・無意識に近いレベルの母子イメージとの関連について、母子画を用いて検討する。特に、母子画に見られる、愛着スタイルの特徴や、愛着スタイルを規定する2次元に関わりの深い特徴を、内的表象としての対象関係イメージに含まれる無意識的観点という次元で抽出することを目的とする。

2 方法

対象者：第1研究の質問紙に回答した236名のうち、第2研究への協力を承諾した大学生69名(男性11名、女性58名)。平均年齢20.02歳($SD=1.21$, $range: 18\sim 25$ 歳)。

調査材料：A4のケント紙1枚。3Bの鉛筆。消しゴム。調査同意書と質問用紙。ケント紙は横向きに配布した。

手続き：最大10名程度の集団法で、馬場(2005)の手続きに従い、母子画を実施した。調査同意書に署名をしてもらった後、「お母さんと子どもの絵を描いて下さい。」と教示し、自由に描いてもらった。描画終了後に、「絵の中のお母さんと子どもは何をしていますか?」、「絵の中のお母さんと子どもはそれぞれ何を考えていますか?」という質問に自由記述で答えてもらった。

3 結果の整理： 母子画の分析指標と分類基準

まず第1研究において用いた一般他者 ECR 尺度において、2因子の合計得点を算出し、得点の中央

値で高低群に分けたものを組み合わせ、対象者を以下の4群に分類した(見捨てられ不安高群・親密性回避高群:HH群,見捨てられ不安高群・親密性回避低群:HL群,見捨てられ不安低群・親密性回避高群:LH群,見捨てられ不安低群・親密性回避低群:LL群)。これらの群は、愛着スタイルのタイプ別に対応しており(島,2005),HH群は恐れ型,HL群はとらわれ型,LH群は愛着軽視型,LL群は安定型となる。対象者の内訳は以下の通りになった。

Table 8
愛着スタイル群の度数(人)

	HH 恐れ型	HL とらわれ型	LH 愛着軽視型	LL 安定型
男性	4	2	4	1
女性	18	10	15	15
計	22	12	19	16

馬場(2005)の分析指標を参考に、母子像の①形態,②サイズ,③表情,④身体接触,⑤アイコンタクト,⑥母子が考えていること,の6つの指標を基準にして分析を行った。このうち,①形態については,独自に以下に示す観点から分類をおこなった。各指標のカテゴリはTable 9に示した。

Table 9
分析カテゴリー一覧

	カテゴリ
①形態	全身/半身/途中で切れている/母子間で不一致
②サイズ	大/普通/小/母子間で不一致
③表情	笑顔/非笑顔/空白/後ろ姿/母子間で不一致/隠れている
④身体接触	手のみで触れる/抱きしめる/膝で抱える/なし
⑤アイコンタクト	母⇄子/母→子/母←子/なし
⑥考えていること	母⇄子/母→子/母←子/別々 母が子どもとそれ以外のことを同時に考えている

①形態は,母子が頭部から足先まで描かれている「全身像」,体の部分が紙面の区切りによって切れているが,場面の中で1つの描画として成立している「半身像」(Figure 2),紙面の中で不自然に体の途中が描かれなかったり,切れてしまっている「途中で切れている像」(Figure 3),母子間で形態が不ぞろいである「母子間で不一致の像」という4つに分類した。全身像として描かれない形態は対象関係が部分対象として存在することを示唆する。無意識的内的世界において,回避したい部分や視野に入れたくない部分が母子像の形態として抽象的に表れると考えられる。

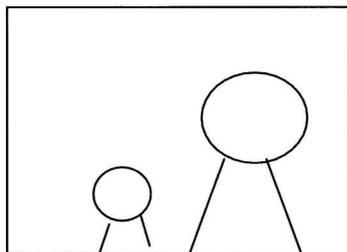


Figure 2 半身像のイメージ図

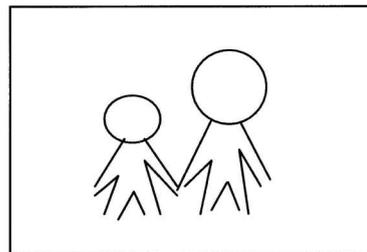


Figure 3 途中で切れている像のイメージ図

②サイズは、全ての描画について母子像のそれぞれのサイズを測定し、分布を作った上で、上位 25% の人数のサイズを「大」とし、下位 25% の人数のサイズを「小」、それ以外の人数のサイズを「普通」とした。その結果、母親像の「大」サイズは 19~28 (cm), 「普通」サイズは 12~18 (cm), 「小」サイズは 2~11 (cm) であった。また、子ども像の「大」サイズは 11~24 (cm), 「普通」サイズは 6~10 (cm), 「小」サイズは 1~5 (cm) であった。その後、母子像の組み合わせで描画サイズを「大」, 「普通」, 「小」, 「母子で不一致, または測定不能」の 3 つに分類した (測定不能は, 布団などで体が隠れていたり, 手のみなど体の一部分のみが描かれていたりするものを含む)。

③表情は、母子が笑っている「笑顔」、母子が無表情であったり、表情が読み取れない「非笑顔」、顔の部分が空白である「空白」、後ろ姿で描かれており表情が見えない「後ろ姿」、母子で表情が不一致である「母子間で不一致」、何らかの状態顔の部分が隠れている「隠れている」の 6 つに分類した。

④身体接触は、手を繋ぐなどの「手のみの接触」、密着度の高い「抱きしめる」、抱きしめるのではなく母親が子どもを膝で抱えている「膝で抱える」、接触がない「なし」の 4 つに分類した。

⑤アイコンタクトは、母子が互いを見つめ合っている「母⇄子」、母親が子どもを見ている「母→子」、子どもが母親を見ている「母←子」、アイコンタクトがない「なし」の 4 つに分類した。

⑥考えていることは、描画終了後に自由記述で母子が何を考えているか回答を求めたものであり、母子が互いのことを考えている「母⇄子」、母親のみが子どものことを考えている「母→子」、子どものみが母親のことを考えている「母←子」、母子それぞれが別々のことを考えている「別々」、母親が子どものこととそれ以外のことを同時に考えている「母が子どもとそれ以外のことを同時に考えている」の 5 つに分類した。

4 結果と考察：愛着スタイルと母子画の各指標の出現率との関係についての χ^2 検定およびフィッシャーの直接確率検定

愛着スタイル 4 群および各 2 因子 (見捨てられ不安, 親密性回避) の高低における、母子画の各指標の出現率について、クロス表を作成し、 χ^2 検定およびフィッシャーの直接法を用いて検定を行った。各指標について有意な検定結果を得たものの一覧を Table 10 に示した。

Table 10
 χ^2 検定およびフィッシャーの直接確率検定で、有意差・有意傾向が見られたものの一覧

指標	カテゴリ		χ^2 値	有意水準	自由度	
愛着スタイル群	形態	半身像>その他	HH群	6.67	$p < .10$	3
		途中で切れている像>その他	LH群	7.779	$p < .10$	3
		半身像と途中で切れている像<その他	LL群	7.698	$p < .10$	3
見捨てられ不安 因子の高低	形態	半身像>その他	高	5.549	$p < .05$	1
		大サイズ>その他	高	4.417	$p < .05$	1
		アイコンタクト母子で見つめ合っているもの>その他	高	2.665	$p < .10$	1
親密性回避 因子の高低	形態	途中で切れている像>その他	高	6.18	$p < .05$	1
		半身像と途中で切れている像>その他	高	7.185	$p < .01$	1
	身体接触	手のみで触れている像>その他	低	2.464	$p < .10$	1

1) 形態

愛着スタイル4群および各2因子(見捨てられ不安、親密性回避)の高低における、「全身」「半身」「途中で切れている」「半身および途中で切れている」のそれぞれの出現率について検定をおこなったところ、次に示す特徴が見られた。

①「半身」像は、HH群すなわち、見捨てられ不安・親密性回避がともに高い「恐れ」型において多い傾向が見られたが、特に見捨てられ不安因子の高い方が有意に多いことが示された。

半身像は、上半身のみが描かれている状態であり、抱き合うなどの親密な関係が描かれたものがほとんどである。しかし、紙面によって体が切れて下半身が描かれないという状態でもあり、切れている体の部分が視野(紙面)に入りきれていないということを表す。つまり、自分の中で視野に入れたくない、回避している部分と向き合おうとしないあり方である。他者への依存性が高いあり方の背後に、無意識では、部分的なところのみ関係イメージをつかんで完結させることで安定を図っているという、見捨てられ不安の高さの背景にある、視野に入りきれていない関係イメージの存在というIWMの働きが推察できる。

半身像という描画にみられる特徴から、見捨てられ不安の高さと他者への依存性の高さは、「上半身」的な良いイメージや他者の自己親和的な面のみでつながっているという状態像を指していると考えられる。さらに、その背後には、「下半身」的な悪いイメージや自己違和的な、視野に入れたくない部分との関わりにくさがあることが暗示されており、それらを視野に入れないことで自分を支えるために、自他の良い面のみと関わろうとすると考えられる。

②「途中で切れている」像は、LH群すなわち、親密性回避が高い「愛着軽視型」において多い傾向が見られ、親密性回避の高い人に有意に多く見られる。

「途中で切れている」像、すなわち画面の中で、胴体や手足などが不自然に途中で切れて、身体の延長部分に空白部分が残される像である。半身像と同様に下半身が描かれなかったり、手足の末端が描かれなかったりする。半身像と同様に部分対象を示唆するものであるが、半身像よりもその印象は強く、不自然さが残るものである。半身像はそれとしてまとまりをもち完結していたが、途中で切れている像のその不自然さと、切れる形で描かない部分をわざわざ「空白」として残している点から、視野に入れたくない回避したい部分を「空白」として意識していること、あるいは「違和感」が示されていると考えられる。

つまり、半身像の多さに見たように、見捨てられ不安は向き合いにくい面を視野に入れないあり方であることが推察されたが、途中で切れている像に見られる親密性回避の特徴は、自分の中で向き合いにくい、回避したいものが、輪郭は持ち得ないまでも、「存在」しているという感覚が心の視野に入っているということが、「空白」としてわざわざ残される点に表れており、それと向き合おう、全体像として掴もうとする能動性との間で葛藤している様子がかがえる。

したがって、意識上では、他者との関係を切った上で自分を保とうとするが、無意識のレベルでは未だに自分の中でも解決しきれていない葛藤があり、それが母子像の形態として表れたと考えられる。また、HH群やLH群は両群ともに親密性回避が高いという特徴をもつが、無意識に表れる回避している部分、対象との関わり方の違いが母子像の形態から読み取れたと言える。

③LL 群すなわち、見捨てられ不安・親密性回避がともに低い「安定」型においては、半身像と途中で切れてしまっている像といった「部分対象」像の出現率が低い傾向が見られた。安定型であり、自己や他者に対して信頼感が高いため、対人関係を安定的に形成していくことができる。そのため、対象関係像も部分対象ではなく、安定したものが現れるのだと推測できる。また、親密性回避因子の高低について有意な偏りが見られた。親密性回避高群のほうが半身像や途中で切れている像を多く描くことが分かった。つまり、部分対象という対象関係に関連しているのは、親密性回避の高さであると言える。

2) サイズ

愛着スタイルとの関連は見られなかったが、見捨てられ不安の高い方が、大サイズの描画が有意に多いことが分かった。サイズは、被検者と環境や外界との関係を表すとされ(馬場, 2005)、そのサイズが大きいかということは、自己主張や過活動、攻撃性を表すとされる。これらから、見捨てられ不安の高さと自己主張や過活動という性質が関連していると言える。現実の対人関係において、見捨てられ不安としての他者への依存性の高さという性質を形成する背景には、自己主張や過活動という大きな心的エネルギーの存在があると考えられる。見捨てられ不安とは、自己を主張することと関連し、自己を見捨てず、見出されることを求めることと関連しているとも考えられる。

3) アイコンタクト

愛着スタイルとの関連は見られなかったが、見捨てられ不安の高い方が、「母子で見つめ合う」描画が多い傾向が見られた。現実の対人関係の中で他者への依存性が高いとされる、見捨てられ不安の高い人は、積極的に他者の支えを必要とすると考えられる。加えて、母子像の関係の“描かれ方”として、例えば、「手をつなぐ」「抱きあう」などの身体接触の形ではなく、「見つめあう」という形態が選ばれることに特徴がある。このことは、見捨てられ不安が高い人は、文字通り「見捨て」られることを恐れるために、対象の視界に自分が常に入ってほしいという他者への依存性の状態像が「見つめあう」像としてあらわれるといえる。また、「見つめあう」像には、他者への依存という形で求めているのは、「見出される」ことや「認められる」ことであることや、自分が相手に見出されることと、自分が相手を見出すこと、あるいは自分が自分を見出すことを含んでいる可能性がある。また、見つめ合うという状態は、自己と他者の2者間において情緒的な交流が保たれているという表れであるとも考えられ、温かな2者関係を求める願望の象徴とも言えよう。

4) 身体接触

愛着スタイルとの関連は見られなかったが、親密性回避が低い人は、手のみで触れる接触の表現が多い傾向が見られた。Gillespie(1994)は、描かれた母子像の母親像は成熟した自我を子ども像は inner child を表すことがあると述べている。両者の接触の質は、未熟な自我(子ども像)を、成熟した自我(母親像)がどのように支えているかを象徴的に表すと考えられる。この観点から考えると、接触による密着度の程度は、自我の分化の度合いを示唆すると考えることもできる。手のみの接触は抱きしめるなどに比べて密着度が低いため、未熟な自我が自立しようとしている動きを示しているとも考えられる。一方で、密着度が高い、抱きしめるという反応は、未熟な自我を育てている最中であるとも解釈できる。したがって、手のみの接触は、自立しながらも他者との接触も両立しうる状態と関連する

面があることを示唆すると考えられる。

総合考察

本研究では、青年のもつ愛着スタイルと母子イメージとの関連について、臨床心理学的観点から検討した。第1研究では、愛着スタイルと意識される観念レベルでの幼少期の母子イメージとの関連を質問紙によって検討し、第2研究では、母子画を通して母子イメージを無意識的観点から質的に検討した。その結果、次のことが示された。

愛着スタイルを構成する、「見捨てられ不安」の次元は、意識的な観念レベルでは、依存的な母子イメージの想起に関連することが明らかとなった。加えて、母子画における無意識的イメージとしては、「見捨てられ不安」や「依存性」は「見つめ合う」像、「大」サイズ、「半身像」として表現されることが明らかとなった。「見つめあう」像や「大」サイズの多さからは、「見捨てられ不安」や「依存性」が無意識に求めていることは、自他を「見出す」こと、「認める」こと、そのことを通しての「情緒交流」であることが示唆された。ただし、「見捨てられ不安」は、「半身像」が多いことから、向き合いたくない「下半身」的な「下位」の面は視野に入れずに、「上半身」的な「上位」の良いイメージのみに関わることによって、安定を保とうとしていることが示唆された。

一方、愛着スタイルを構成するもう一つの次元である「親密性回避」の次元は、幼少期の母子イメージという意識面では関連が示唆されなかった。しかし無意識レベルでは、「途中で母子像の体が切れる」部分対象として表れ、「切れた体の延長部分が空白で残される」という表現が特徴的に見られた。このことから、「親密性回避」は、自己を重視し、他者との関わりを持とうとしない回避的姿勢の背後には、自己と対象の部分的な関係イメージがまとまりをもたないことに対して、何らかの葛藤を抱えているという新たな一面が垣間見えた。加えて、「回避」している部分を「空白」として描くことに、回避している部分の輪郭や中身はまだつかめないまでも、その存在を視野に入れようとする能動的な姿勢がうかがわれる。

以上のように本研究を通して、愛着スタイルを形成する要因である見捨てられ不安や親密性回避という特徴の背景にある、IWM という内的表象の様相を読み取ることが出来たと言える。自他の見え方や愛着関係の変容を可能にしていくサポートに有効な観点を探るには、愛着スタイルの「分類」のみでは捉えきれない、その愛着スタイルを生み出しているイメージに含まれている無意識的観点を見出していくことが有効であることが示唆された。今後さらにこうした観点を見出していくことが重要である。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum
- 青柳 肇・酒井 厚 (1997). アダルトアタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究 10, 7-16.

- 馬場志津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Bartholomew,K., & Horowitz,L.M. (1991). Attachment styles among young adults ; A test of four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bartholomew,K. (1990). Avoidance of intimacy ; An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.
- Bowlby,J. (1969). *Attachment and loss:Vol.1.Attachment*. New York:Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1976 母子関係の理論 1 : 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby,J. (1973). *Attachment and loss:Vol.2.Separation*. New York:Basic Books. (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論 2 : 分離不安 岩崎学術出版社)
- Brennan,K.A.,Clark,C.L., & Shaver,P.R. (1998). Self report measurement of adult attachment : An integrative overview. In J.A.Simpson & W.S.Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. 46-76.
- Gillespie,J. (1994). *The projective Use of mother and Child Drawings: A manual for clinicians*. New York:Brunner/Mazel. 松下恵美子・石川 元 (訳) 2001 母子画の臨床応用——対象関係論と自己心理学—— 金剛出版
- 北川 恵 (2006). アタッチメント測定手法としての投影法の意義・成果・課題 四天王寺国際仏教 大学紀要 No.41 1-14.
- 久保 恵 (1998). 愛着とワーキングモデル 京都大学教育学部紀要 No.44 313-324.
- 久保田 まり (1995). アタッチメントの研究——内的ワーキング・モデルの形成と発達—— 川島書店
- 南里裕美・谷 直介 (2006). 統合失調症患者における母子画の研究 ——事例を通して—— 教育科学セミナー No.37 101-107.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究 **5**, 19-27.
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係 ——内的作業モデル尺度作成の試み—— 性格心理学研究 **9**, 59-70.
- 瀧川由美子 (2003). 幼少期の愛着形成が青年期に与える影響について ——幼少期の愛着の連続性から考える—— 奈良文化女子短期大学紀要 **34**, 41-47.